

# 古墳から見た6,7世紀の上野地域

右 島 和 夫

## はじめに

1. 上野地域の概観
2. 上野地域の横穴式石室の変遷

## 3. 古墳から見た6世紀後半の上野地域

## 4. 古墳から見た7世紀の上野地域

む す び

### 論文要旨

現在の群馬県の地域は、律令時代に「上野国」と称されていた地域であり、古墳時代には、「上毛野」、「毛野」と呼称されていた地域と密接に結びついている。その地理的環境を見ると、北および西寄りの発達した山間部から利根川とその支流を形成する多数の中小河川が、肥沃で広大な関東平野の西部地域を形成している。古墳時代に入り、組織的で大規模な農耕が開始されると、この恵まれた生産基盤の上に、東国でも最も有力な地域へと展開していった。また、後の東山道に近いルートを介して、畿内と東国を結ぶ交通上の要衝を占めていたことも、古墳時代の当地域と畿内との関係を考えいく上で重要である。

前橋市総社町の総社古墳群は、当地域の6世紀から7世紀にかけての歴史的展開を跡づける上で欠かすことのできないものである。6世紀後半の総社二子山古墳の築造された時期には、これと同規模の前方後円墳が各小地域を単位として林立しており、これらの中から地域の一元的な支配をうかがわせる勢力を摘出することは困難である。これらの前方後円墳を最後にしてその後築造は行われなくなる。二子山古墳に引き続く7世紀前半の愛宕山古墳は、一辺56mの方墳であり、大型石室内には刳抜式家形石棺が安置されている。この時期、本墳以外には顯著な大型古墳は全く認められないであり、総社古墳群の勢力を頂点にした地域の再編成が成立したことを示している。また、方墳や家形石棺の存在から、この再編成に大和政権が直接的に関わっていたことが理解できる。

愛宕山古墳に続いて7世紀後半に築造された宝塔山古墳は、一辺60mの方墳で、「截石切組積石室」といわれる整美な石室を有し、刳抜式家形石棺と壁面への漆喰塗布が注意される。宝塔山古墳やこれに続く蛇穴山古墳の築造された7世紀後半には、一旦途絶えていたその他の有力古墳の築造が、両墳の技術的影响下に再開される。その数は30基ほどであり、総社古墳群の2古墳を頂点にした地域の再編成に呼応したりかたを示している。この時期を最後に古墳の築造は完全に終わりを告げるのであり、地方における律令体制の完成が一步進んだことを物語っている。